

恐竜溪谷ふくい勝山ジオパーク 現地再審査報告書(公開版)

【日程】 2015 年 11 月 23～24 日

【審査員】 尾池和夫（日本ジオパーク委員会委員長・京都造形芸術大学学長）・宮原育子（日本ジオパーク委員会委員・宮城大学）・廣瀬 亘（JGN 現地審査員・洞爺湖有珠山ジオパーク）

【主な参加者（所属）】

山岸正裕（勝山市長・ジオパーク推進協議会会長）、松村誠一（勝山市副市長）、水上実喜夫（勝山市商工観光部長）、山内千鶴代（市商工観光部ジオパークまちづくり課長・ジオパーク推進協議会事務局長）、吉川博輔（勝山市ジオパークアドバイザー（専門員））、天立雅浩（市商工観光部ジオパークまちづくり課主幹※）、畑中健徳（市商工観光部ジオパークまちづくり課主任※）、田中美穂（市商工観光部ジオパークまちづくり課主事※）、松村英之（市商工観光部はたや記念館ゆめおーれ勝山主任※）、但川隆治（市教育委員会教育部学校教育課長）、北川喜樹（市教育委員会教育部学校教育課指導主事※）、竹内利寿（福井県立恐竜博物館館長）、渡辺尚弘（福井県立恐竜博物館サービス室長）、宮田和周（福井県立恐竜博物館主任研究員）、藪田哲平（福井県立恐竜博物館研究員）、獅子原朋広（福井県観光営業部ブランド営業課参事）、竹原幸雄（勝山市エコミュージアム協議会会長）、西山和彦（勝山市エコミュージアム協議会副会長）、藤井由紀夫（勝山市エコミュージアム協議会副会長）、久保光子（勝山市エコミュージアム協議会副会長）、松山信裕（勝山市エコミュージアム協議会顧問）、上田秋光（NPO 法人恐竜のまち勝山応援隊理事長）、但川弥生（NPO 法人恐竜のまち勝山応援隊ジオ・観光部長）、國吉一實（小原 ECO プロジェクト代表）、川上千尋（公益社団法人福井県観光連盟部長）、五十嵐照美（勝山市ジオパークガイドの会副会長）、小林則夫（勝山市ジオパークガイドの会・池ヶ原湿原連絡協議会会長）、寶珍直子（野向地区かつやまっ子応援ネットワーク事務局・野向公民館主任）、三好雅也（福井大学教育地域科学部准教授（火山学））、原田恵美子（むろこ女性の会代表）、村上千恵子・笠川栄子・鈴木ひろ美・山口郁恵（むろこ女性の会）、酒井幸子（縄文の里料理研究会会長）、太田紀子（縄文の里料理研究会）、斉藤けさみ（はたや記念館ゆめおーれ勝山職員）

[報道機関]：福井新聞社、日刊県民福井、福井テレビ

[見学者]：宇治美德・市橋弥生（佐渡ジオパーク）、小林竜太・藤井利衣子（南アルプス（中央構造線エリア）ジオパーク）、中田悟・中村真介（白山手取川ジオパーク）、坂口豪（首都大学東京院生）

【主な見学・訪問地点】

勝山市教育会館、のむき風の郷、福井県立恐竜博物館、かつやま恐竜の森管理棟（ジオパークビジターセンター）、市民交流センター、小原 ECO プロジェクト（小原集落）、大矢谷白山神社、大清水、七里壁、勝山市役所、はたや記念館ゆめおーれ勝山

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

「恐竜はどこにいたのか？大地が動き、大陸から勝山へ」をメインテーマとしている。このジオパークを構成する恐竜、火山、九頭竜川の河成段丘など地形といった要素に対応するジオサイトが多く存在し、それぞれメインテーマとの連携が図られている。ジオパークの約半分が白山国立公園、奥越高原県立自然公園に含まれ、文化財保護法などさまざまな法令に基づいてサイト保全が図られている。また、ジオサイト設定や保全・活用にあたっては地域住民の意向も尊重され、草刈りや日常的清掃など地域による主体的なサイト保全活動も活発である。勝山市では「勝山市景観条例」が制定され、市街地および平泉寺周辺で広告物など景観にも配慮が成されている。

化石発掘地については、事前に定められた採掘計画に従って最小限の採掘が行われている。環境汚染が発生しないよう土砂流出や護岸などの配慮が成されるとともに、発掘された化石は福井県立恐竜博物館により保管・研究が行われ、保全とともに価値の向上がはかられている。採掘現場に隣接して 2014 年に野外恐竜博物館が開設され、ジオツアー等で活用されるとともに学術研究の重要性も啓発する場となっている。採掘ズリはかつやま恐竜の森にて化石発掘体験に活用され、貴重な化石が発見された際は恐竜博物館にて管理されている。海外産化石の販売は完全に取りやめられた。

2) 教育・研究活動

県立恐竜博物館や福井大学などと連携・協力体制が構築されている。ジオパーク学術研究等奨励事業が2014年度から開始され、その成果はWebサイトで公開されている。県立恐竜博物館による学術研究は活発である。次回の展示更新に合わせ勝山地域での研究成果に基づいたジオラマが構築される予定であり、住民に対する教育普及活動・一部のジオツアーには博物館研究員が積極的に協力している。小中学生に対してはジオパーク推進協議会・学校教員・大学・博物館および地域住民の連携のもとジオサイトを活用した野外学習が活発に行われている。ESD、環境教育は盛んに行われているが、それらがジオパークとどのように絡んでいるのかはまだ明瞭でない。ジオパークの理念を汲み取り、学習プログラムなどを体系的に整備することを期待したい。

3) 管理組織・運営体制・ジオパーク連携・ネットワーク貢献

2013年の日本ジオパーク条件付き認定をうけて、市役所内の機構が大幅に改められた。市長が協議会会長となり、ジオパーク担当部署とエコミュージアム担当部署を統合した「ジオパークまちづくり課」と市長の特命によるジオパーク政策監が2015年に設置された。課職員・ジオパークアドバイザー5名、学校指導主事や考古学学芸員2名からなる人的体制も整備され、ジオパーク活動を支える態勢が整いつつある。エコミュージアム関係者、小原ECOプロジェクト・ジオパーク関係者との協力関係は目に見えて進歩し、サイト整備や教育・ジオツアーや良好な協力体制が構築されつつある。日本ジオパーク中部（北信越）ブロックの事務局を担当しブロック内連携を推進するとともに、隣接する白山手取川ジオパークとの共同事業、国内ジオパーク大会等での成果発表などジオパーク連携・ネットワーク貢献についても大きく前進した。Facebookを利用した情報発信も活発である。まちづくりにおいては事務局増強の効果を最大限に生かせるよう、ジオパークまちづくり課およびジオパーク政策監がリーダーシップを発揮しジオパークの理念をより意識したとりくみを望む。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

ジオパーク関係者がエコミュージアム関係者と日常的な意思疎通を行い、それぞれの活動がそれぞれシームレスに繋がることへの気づきが進んだ。これにより、既存のエコミュージアム系活動の中にジオパークの視点が取り入れられ、エゴマなど地域の地形・地質・気候特性を活かした商品開発も進んでいる。ジオパークに関わる保全活動などを子供達とともにを行い、地域の価値を意識するための教育と地域の将来の担い手を育てることも意識されている。恐竜博物館については、隣接する敷地にあるかつやま恐竜の森にジオパークビジターセンター機能を持たせ、年間数十万人におよぶ博物館来訪者を化石発掘体験もあわせジオパーク側に誘導する取り組みが始まった。ビジターセンター周辺施設には年間6万人程度が訪れたとのことであり、今後の展開が期待される。

ガイド養成については、15名のガイドが引き続き活動しているとともに、ガイド養成講座も市民大学講座などを活用して継続的に実施されている。ジオパークアドバイザーの協力のもと各サイトにおいて、恐竜・火山・九頭竜川による造地形作用なども意識したガイドツアーが工夫されはじめている。ジオツアーはスキージャム勝山等民間企業や事務局・観光関係者がリードするジオツアーに加え、2015年からは「ジオツーリズムプラットフォーム構築事業」により旅行者やビジターと地域内の着地型ジオツアーを結びつける試みが始まっている。ジオパーク内の導線については、勝山駅前広場の目につきやすい場所やゆめおーれ勝山など勝山市が直接関与する主要施設にジオパークの各種案内が掲示されているほか、集落名表示板にジオパークロゴの表示が始まるなどジオパークの見える化が進み始めている。一方、観光協会のウェブサイトや施設・ポスターや小松空港・福井駅やえちぜん鉄道などジオパークへの導線についてはジオパークの見える化はまだ充分ではない。今後、市が設立を予定している観光まちづくり会社を軸にジオパークの見える化を意識した観光戦略を展開する計画である。一方、ジオパークに限らず福井県北東部全域について、例えば駅前などでの観光プロモーションが充分ではないように見える。福井県の観光関係部署にはジオパークも意識した広域的な観光戦略や福井駅周辺など観光拠点での情報発信を望む。

5) 国際対応

ウェブサイトや主要なパンフレット・出版物では英語・中国語対応が成されている。各ジオサイトの解説版には英語が併記されている。ガイドの外国語対応については積極的に行われていないが、恐竜博物館との連携がさらに進むことで海外からのビジターが増加する可能性があるため地域内で外国語会話能力を有する住民との協力などの検討が行われるとよい。

6) 防災・安全

地域向けの勉強会や学校では火山災害や水害・雪崩災害など自然災害に関する教育が行われている。また、自然災害発生時や悪天候時には主要ジオサイトのパトロールやその結果を踏まえた通行止め措置が行われている。熊など危険動物の居るエリアについては熊鈴の装備や注意喚起も行われ、ガイドにはガイド保険がかけられている。ビジター向けの災害情報は勝山市 Web サイトから発信されている。

7) 結論

※再認定の場合

恐竜渓谷ふくい勝山ジオパークでは、2013年の再認定審査において条件付き再認定となった結果とその要因を地域が自らの課題として真摯に受け止め、この2年間にジオパーク関係

者や地域住民がジオパークネットワークと協力しつつ、課題の解決に努めてきた。その結果、ジオパーク活動を支える協議会事務局組織の強化、ジオパーク・エコミュージアムの連携の発展、ジオパーク中核施設の整備や県立恐竜博物館の主要ジオサイト化、海外化石販売の中止など、2年間という短期間に関わらず、指摘された課題の多くが順調に改善されつつある。ジオパークに至る導線整備などいくつかの課題については今後さらなる改善努力を要するものの、前回条件付きとなった原因の多くが改善されただけでなく、この地域のジオパーク活動やそれを支える住民活動は大きく前進したと認められる。以上の点について総合的に判断し、恐竜溪谷ふくい勝山ジオパークについて新たに2019年までジオパークとして活動することを認める「再認定」とする。

※再認定を認めない場合（この選択枝をとることは難しいと判断する）

恐竜溪谷ふくい勝山ジオパークでは、2013年の再認定審査において条件付き再認定となった結果とその要因を地域が自らの課題として真摯に受け止め、この2年間にジオパーク関係者や地域住民がジオパークネットワークと協力しつつ、課題の解決に努めてきた。その結果、ジオパーク活動を支える協議会事務局組織の強化、ジオパーク・エコミュージアムの連携の発展、ジオパーク中核施設の整備や県立恐竜博物館の主要ジオサイト化、海外化石販売の中止など、2年間という短期間に関わらず、指摘された課題の多くが改善に向けて動いているが、それらの多くは改善途上にある。また、ジオパークに至る導線整備などいくつかの課題については劇的な改善が認められていない。以上の点について総合的に判断し、恐竜溪谷ふくい勝山ジオパークについては前回の条件付き認定もあわせ、ジオパークとして活動することを認めない。